

第12講 ミケーネ文明の興隆

集団としての人とモノ・文化の移動説の問題点

文化的連続性を軽視する傾向

外来文化重視

短期的変動の局面のみを重視する傾向

征服と隷属という歴史観の再生産

政治的・経済的・地理的・文化的環境からの考察の必要性

狭い地域と広い地域との関係性の中でとらえていくことが重要

地元における文化的革新や創造、文化的発展の主体性に注目する必要

文明発展の理由

中期ヘラディック後期以降、本土とキクラデス、クレタ、アナトリア、中部及び北

部ヨーロッパ、シリア、シシリー、南イタリアとの交易の発展

シリアではギリシア本土産の土器が好まれ、コピーされる。

シシリーやサルディニアにはミケーネ人の居住地があり、職人が生産する

南イタリアのアプリアに大量輸出

ウルブルンの沈没船（前1316–1305年）

船体長：15メートル、積載量20トンの商船

船材は杉材

船籍については諸説あり（ミケーネ、キプロス、カナン、カッシート、
エジプト、アッシリアなど）

キプロスを出港して小アジア沖で遭難

東地中海の海流と風を利用

各地の製品18,000点以上を積載（約10トンものキプロス産牛革型銅インゴット、約1トンものスペイン産もしくはアフガニスタン産錫、未加工のガラス材、エジプト産の黒檀、エジプト産の象牙やカバの歯、琥珀、金、駝鳥の卵、ドングリやイチジク、ザクロやオリーブの実、ファイアンスや象牙の器、黄金製の盃（カリケー）、黄金製や銀製の装飾品（首輪や指輪）、キプロス産の鉢、カナン産のアンフォラ、粘土

製のランプ、船道具、象牙で縁取りされた書き物板、アルプス東部ないしはイタリア産の矢尻と剣、ブルガリア産の石斧、イクナトンの王妃ネフェルティティの名を刻んだ黄金のスカラベ、など)

均質なコイナーと呼ばれる文化⇨本土の諸王国間の活発な交易の結果

ペロポネソスにおける人口増加⇨居住地の数の増加

居住地は中期ヘラディックから後期ヘラディックの初めにかけて連続

ミケーネ、ピュロス、テーバイ、オルコメノス他

物質的富の少数の者への集中⇨貴族層（戦士貴族層）の形成

メッセニアやアッティカにおけるトゥムルス（塚型墓）とミケーネにおけるソロス墓の存在。

ミケーネの竪穴墓は寡頭政を示しているのか、君主政を示しているのか。

それとも二つの王朝の併存を示しているのか。

ソロス墓：支配者層は家族毎に集まり、墓は数世代に亘って使われ、王朝の存在を思わせる

キクラデスには王家の墓は存在しない：政治的にも経済的にも独立した都市の存在

農業：オリーブ、葡萄、穀物の三本柱

手工業：専門化、大量生産と標準化

鉱山業：ラウリオンの銀と銅の生産

交易：非常に活発